題　目　除去土壌問題についてのオンライン・ディスカッションの発言分析-議論構造抽出と討議の質の観点からの評価-

氏　名　原 大拓

指導教員　大沼 進

社会の分断に繋がる発言が問題視されるオンライン空間において,合意形成が求められる問題で建設的な議論が行われるかを確認する作業が求められる。種々の学問分野で合意形成に繋がる議論のあり方が探求されてきた。しかし,分野を越えて統合的に知見を組み合わせた例はほとんどない。本研究では異なる学問領域で発展してきた公共的討議のあり方や議論評価をめぐる研究の複眼的評価を試みた。具体的には,議論構造解析の手法である Issue-Based Information system (IBIS; Kunz and Rittel, 1970) と,討議倫理の系譜で開発された Discourse Quality Index (DQI; Steenbergen et al., 2003) を用い,福島県の除去土壌問題に関するオンライン討議を題材として分析を行った。参加者は東京と大阪の在住者であり,東京と大阪のそれぞれで議論スペース(Discussion Space: DS) を設け,各 2 週間議論を行った。発言の分析から,東京と大阪の両 DS で,共通善の要素ではリスク・コスト・公共的ベネフィットの観点から発言する参加者が多くを占めていた。また,議論内容の特徴としては,東京 DS は再生利用や最終処分の具体案や,政策遂行上の課題について多く意見が出し合われていたものの DQI のスコアは低く,共通善以外の観点からの提案が多かった。一方で,大阪 DS では被災地の人々に同情を示しつつも,内容としては功利主義的な立場からの投稿が多かった。全体を通して,両 DS で著しく思いやりや尊重を欠いた発言はみられず,DQI のリスペクトの項目も一定の割合を示したことからある程度建設的な議論ができていたと解釈することもできる。また IBIS の観点からは,全体として Idea と Pros の割合が高く,功利主義的な観点からの提案や行政の対応への客観的な批判が多かった。本研究の限界は,議論内容に重点を置いており,統計的な観点からの分析や検定は行っていないことと,AI が IBIS モデルに基づいて行った分類の精度を確認することはできなかったことである。しかし,本研究は個別に実践と検証が行われてきた議論の分析手法を組み合わせ,オンライン討議を複眼的に評価することを可能にした。また,合意形成が難しいとされる問題について,専門家の同伴なしである程度建設的な議論ができることを示した点で貢献がある。